

『湘煙日記』試論

和田 繁 二郎

1

中島湘煙の「日記」はかなり長期にわたり書き続けられたものと思われるが、遺憾ながら現在残されているものは極めて小部分にとどまる。おおよそ明治二十四年から没年の三十四年の十年余についてみても、三七八七日のうち、四五六日の分を見得るのみで、十二パーセントにしかすぎない。とくに、夫信行の死の前四年ばかりが全く空白であることは惜しまれる。しかし、死の直前の五か月ばかりが見られるのは幸いである。

いま、これらを三つの時期に分け、明治二十四・五年のものを第一の時期とし、発病してイタリーより帰国後の二十七年と二十九年のものを第二の時期と見、最後の半年弱を第三の時期とすることができよう。

2

第一の時期のものは、明治二十四年九月十三日より十月三日ま

での二十一日間、同年十一月二十七日より十二月三十一日までの三十五日間および、翌二十五年の九月二十二日より十二月十三日に至る五十三日、あわせて、一〇九日のものである。

このあたりの日記は、社会のことや家庭の雑事を記したメモ程度のもが多い。時に読書のメモがある。なかでも信行を中心としての政界の記事、とくに政治家の活動に批判的な感想を付したものが特徴を示している。衆議院解散前後（明治二十四年暮れ）の暴徒の横行や、議員の幼稚さなどの批判には精彩がある。しかし、記録文学性というほどでもなく、メモを遠く出るものではない。

三十一日（明治二十四年十二月）

（前省）君と妬を擁して種々の世事談に余念なし。談話中我は激して曰く、「政府が政府党を作り民党と戦を第三期議會に交へんと決心固より可なり。されど賄賂を以て、警察権を以て、府県知事郡戸村長を利用して陰にこれを為す。何等の醜ぞ」と。君微笑して「聊靜かに聞け、元來社会なるものは高尚潔白なるものに非ず。これを真面目に高尚潔白なるもの

と信じ、(中略)落胆するときは、終に世に出て事に当るの勇を失ふべし。(中略)二三の友に語りて曰く、議會は子兒を遊ばすの場所なり。子兒を遊ばさんと欲せば先おのれも子兒の仲間入為さざるべからず。只子兒が思のまにまに遊ばさしめず、(中略)秩序を紊ださしめざるにあるのみ。(中略)「我其好譬喻なるに感ぜり。(後略)

このような日記の執筆態度について、右の記事の後、就寝前に書いた一文がある。

我が日々の事を記する、他日に存せんとに非ず、他人に示さんとに非ず、只聊か家を為^{おこ}むるもの務たるを知ればなり。筆の巧妙を望まざるに非るも、終日衣食の指揮、接客の忙、我をして意匠を払ふの余地なからしむ。筆紙に現はるるの記事に至ては、毫も虚偽を用ひざるも、只胸裏に泛びし悪感念、また相識る者の不善行等、知るがまにまに記存する勇なきは自ら以て大に恥るところなり。

ここでは、ただその日の事を記すのは「家を為むるもの務」だという。どういう点で「務」となるのか、いささか不分明であるが、真実を記すことに意味があるようである。それは「悪感念」や人の「不善行」をありのままに記すことができなかつたということを恥じるというところから推測される。これについては、この後に続く文章において、この一年政治上、生活上はじめの経験・見聞が大変多かつたことを縷々述べた後で、

老後この少壮の記録を見は、果して如何なる感を起すや。我

は我が父母親族に対して情を尽くさざるを恥。夫君に伴ふて至らざるを恥。君の親族に向て、我が何等の世話を為さざるを恥。子兒に対して教化の行はれざるを恥。教を世の賢者に受くるに吝なるを恥。救を世の貧者に及す能はざるを恥。願くは我をして年々始ての事に会する多からしめ、悪感念を生ずる事少なからしめ、友人の悪行為を遠慮なく諫むるの勇あらしめ、而して心に恥と為すところのものを少なからしめん事を深く期するなり。

と述べているところが考察の手がかりになろう。これによれば、己れの至らざるところ、恥すべきところを明確にしようとしており、さらに、「友人の悪行為を遠慮なく諫むるの勇あらしめ」とするのである。それは、すなわち「記存する勇」を意味している。ここで、当時の湘煙の日記は、みずからの真実を確認する体のものであつたと言い得よう。したがって、そこに真実のもつりアリテは認められるものの、文学の質としては、それに内包された倫理的意味以上の文学性を認めることは困難である。

3

第二の時期のものは、明治二十七年一月一日から、同五月十七日までと、二十九年九月二十七日より、同年十二月三十日に至るものとである。

この時期の湘煙はすでに病を得た人であつた。この病は、二十五年の晩秋あたりから、自覚されていたものである。二十五年十

月三十一日の記事では、信行がイタリヤ全權公使として赴任することが決まり、湘煙も同行することを決意する。そこで、「我は難治の病を擁くを知る。又此病には尤も航海と談話との恐るべきを知る。(中略)依て我は人なきの辺に於て時に我が死後の事を母公にいひ置たり。」と記している。病氣の記事は、十月十二日に、イタリヤに滞在したことのある者が、船中の苦痛を語ったのに対し、「家人之を聞きて竊に我が病骨の禁る能はざる由を愁ふ」とあり、さらに、十七日には、「一夢覚我身火の如し。君を喚びて解熱薬を請ふて服す、苦惱不可言。」とある。湘煙は不治とは明言し得なかつたが「難治の病」を自覚していたのである。

その病氣はイタリヤで明確になり、二十六年、保養地アンチオで療養、七月十五日、信行とともにローマを発ち、九月十一日帰国するのである。その翌年の一月元日よりこの期の日記ははじまる。

この元日は「昨冬おしつまりて我が病危篤と聞玉ひて急装来着せし家殿は北堂と炬を擁し、相對する顔の皺には長寿の春を深し玉ふ。」とあって、めでたいムードへ引きこんでいるが、歳晩に湘煙が危篤に陥いたことが明らかであり、めでたいの一角で迎え得られた正月とは言えそうにない。しかし、一家の人々の「初筆」の催しや、弓を射る者、羽子をつく者、旧話をたどる者、将来を語る者、「一家各遊を異にし、されど各歡を尽くして目出度この一日を送れり」と結んでいる。しかし日ならず、四日には「夕眠に就かんとする頃俄かに鼓動烈しく胸辺平かならず」とい

う状態になり、翌五日には「午食を喫するや俄かに寒氣を感じたり。頃くして熱度三十九度に達。頭痛烈しく左背一団の痛処起りて呼吸、坐臥、都て困難を覚ふ。夜間は咳頻りに生じて遂に眠る能はざりし。」という病状になる。

しかし、その後、さして発熱・病状の進行は著しくなく、時折、発熱する程度で、詩を作り、画を描き、揮毫をし、ときには弓を射、經文を写し、また信行や母と近郊に遊んだりしている。このような、日々を繰り返して、次の日記は二十九年九月より、さらに十二月に至る。

その間の日記は、記述の様相は、第一期とさしたる変化はないが、隨筆風の記述が増えていることが注目される。隨筆・隨想の文はすでに、これまでも見られたが、先述のような、「家を為むる」倫理的関心におされて比較的影が薄かつたのであるが、それでも隨筆についての関心は早くより自覚されていた。それは、二十四年九月廿八日の記事に「夜來獨を別て書をよみ倦て我が昨年の隨筆を見るに、なか／＼おもしろき事もありて感情といふものは其時々にはかたに作り得るものに非ざれば端なく起りし感情の真を写しおくは他日最も興多き事に覚ふ。」とあるのによつてうかがうことができる。この「隨筆」というのは、おそらく、「女学雜誌」に発表した十編近い評論をさすものと思われるが、あるいは、「其時々」に「端なく起りし感情の真を写しおく」という言い方から見ると、それまでも日記を書いていて、そこに書きつけたもので、評論とは異なるものとも言えそうである。

この「端なく起りし感情」と言うのにふさわしい文章が二十七年よりかなり散見できる。

二十七年一月十三日、「故山の旧味」

同 十六日、「現今の女兒」

同 十七日、「墓を捕へんと欲して却て蛇に遇ふ」

同 二月 六日、「撰筆日」「代価の騰落」

同 十五日、「横浜市の軍議聞得て眠覚の料となる」

同 廿日、「無題（茶道の事）」

同 五月 六日、「金王均の事あるや世好て口さきのみ

の征韓論一

同 九日、「熊沢寛良」、「鬼頭悌二郎氏の訃報」

二十九年十月二十一日、「無題（当今女学生の雅味乏しき事）」

同 十一月六日、「伊藤先生揮毫の席には唸り手を要する

ること」

同 七日、「無題（大名的気分）」

同 八日、「無題（女子教育のこと）」

同 十四日、「軍略余す所なし」

同 十五日、「坂崎とく」

同 二十三日より十二月二十日に及ぶ「冬夜物語」(一)~(四)

これらがおもなものであるが、最後の「冬夜物語」は、十一月二十三日の記事中、「晩食を喫して二時間は各好むところを為し了りて茶を煎し談話となるなり。この談多く維新前の事に關するを以て母公談話の主となり、夫君時々補助の勞を取り而我

は聞き役なり。此間にありては宛も我は珍客の位置にあり他は共に接待員の様あるもおかし。」とあるのによつて、明らかにならぬに、母の談話の要領を筆記したものである。したがつてこれは、随想と言うよりも説話とでも呼ぶべきものである。これらのほかとくに長文のものではないが、随想めいたものはかなりあり、明らかに日記のもつ記事性を越えている。「冬夜物語」以前のものは、時事評論めいたものも多いが、随筆性の濃いものがある。いまその二三と、冬夜物語の一編をあげよう。

八日（明治二十九年十一月八日）

天色快明、庭園を徜徉すれば日影衣に登りて実に春の如し。

偶まあいと呼ぶ十三の女来る。「どうや、達者か」などいへば、「ハイ、どうも腸胃が不健康で困ります。医者が学校をやめと申しますけれど今日の世の中、小学高等位は卒業せずばと思ひます。いつも試験後は病気が出ますから、只落第さへせねばと親々もいひますけれど余り席順を末にせらるゝも口惜しく、然し理科に聊か意を用ひれば大した事も」など、言論口を衝て出る様、嗚呼、教育といふものも恐ろしきものなりと感じたり。当時我が家に仕る十六の婢、其名ははつ、或時我戯れて、「はつよ、そなた一万円と千円といづれか多とおもふぞや」と問へば、知れた事聞き玉ふものかなといひたき顔して、「それはあなた千円が沢山でござります」と。これを聞て我は実に可憐におもひたりしが、今如此女兒に對していよゝ彼が愚を憐みたり。

十五日(明治二十九年十一月十五日)

(前略)坂崎とく(中略)初我家を浪華に卜するや彼来り寓す。

挙て衣食の事を委す。一日家の所有者来り驚き責む。「この後庭の牆何すれぞかく損類す」と。我も其故を知らず。家主去つて後、とく微笑して曰く、「妾拔て以て飯を炊しぐの薪木に代るなり」と。我聞て一驚を喫せしかも亦彼が貧を貧とせざるの量あるをおもしろく感じたる事ありしが、今になりて考ふれば彼は貧を貧とせざるに非ず。貧に処するの道を工夫するの念量なきなり。曾て彼芝佐久間町に住す。母公と行て訪ふ。近隣に問ふて皆不知。漸くにして尋るを得たり。玄閨様の処に行て直に驚きたり。障子多くは骨を露はし、緒の断れし木履算を乱だし、室に入れば炭とりに炭なく茶罐に茶なく、斜におきし机の上は塵埃堆く、あんかも洋灯も出たまくなり。人きたなき家を評するには大雅堂を以てすべけれど我は信ず、雅人の家のきたなきは一文字なき裏棚の肴売人力車夫の家のきたなきのきたなきに似ざるを。どこかに風流趣味の潜むべきに、こはソモいかにと、覺す母と顔見合せ倉々に家を出たりし事あり。主の名は斌、音貧に通ず。斌は徳を得て徳、徳ならず。とくは斌に倚りて貧益貧とは何等の悪運ぞ、嗚呼。

十一日(明治二十九年十二月十一日)

冬夜物語の十二

兄弟あり。其母時に年六十一。兄と弟相謀り母を深山幽谷の

中に棄んと欲し、母を輿して行く。母途上木片を処々にに投布し去る。兄弟之を見囁て曰く、「これ道を記して再び家に帰らんと欲するなり」と。母聞かざるものゝ如く纏て山深く人絶ゆるの処に至り將に母を棄て去らんとするや、母舒ろに呼て曰く、「汝兄弟、汝等は来るの時只管吾を棄んと欲するの情のみ切なれば心能く其途道を記せざるべし。吾予め汝等帰路の迷はんを謀り木片を投与しあれば之を目途として日暮道を失ふなかれ」と。兄弟これを聞きこの不幸の子に對して慈愛猶此の如くなるかと慙愧措く能はず、深く其罪を謝し奉じて家に帰り奉得意らざりしとぞ。

このように、日記の記事性を越えて、文筆を練り、思いを文学的領域に馳せているのであつて、彼女が病中なお、自らを見つめるとともに、表現者として、自己を越えた世界にも目を注ぎ、生命の充実をはかっていたことが知られる。

なお、「冬夜物語」の十三(明治二十九年十二月廿日)は、二四〇〇字に及ぶ長文のもので、彼女の幼時に入入りしていた實在の女性、お房の略伝を記したもので、彼女自身、「世に小説本演劇等には如此奇遇ありとはいへ實際にかやうの事あらんとはさながら夢に夢見る心地せらる」と付記しているように、偶然の多い人と人との出会いと、悲喜こもごもの波瀾万丈のストーリーは十二分に小説の重量感をもつたものである。遺憾ながら、骨組みだけを記していて、人物形象、あるいは心理描写等一切省略しているので、小説作品と見ることはできないが、いましばらく健康を保持

することができておれば、一編の作品として完成し得たのではないかと思われる。

当時、博文館より寄稿の依頼があり、論説として「主婦の心得」(「太陽」明治三十年一月号)を載せているが、これの草稿らしいものが、この十二月十七日に「家庭」と題して綴られている。これは三〇〇〇字ほどの長文である。さらに、博文館からは、小説の寄稿をも要請していたらしい。同二十五日には「歳暮閑人も甚閑ならずの時博文館展書を寄せ何か寄草しくれと請ふ。棄ておけば夫迄なるにつまらぬ事を筆しかけていらぬ忙しさを為したるは自ら省て愚。」と書いているが、三日前の二十二日には、「家庭の二」と題して、怠け者の亭主と「おみよ」という女房の会話を書いている。これは、亭主の運勢が将来大変な金持になると出ているのだが、手足を使わず、煙草ばかりのんでる罰で金持になれないのだと言われる話である。これから後のことは書かれていないが、「一沈一浮」(明治三十年一月)の原型と見られる。この小説の不出来は別に考究したとおりであるが、右のお房の伝を書いていたら、一応小説らしい作品になっていたのではないかと思われる。しかし、理想主義ないしは啓蒙意識のなお健在であった湘煙には、お房の人間の辛苦を客観視することよりも、社会の不合理や金持のエゴを衝くことに急であつたのであろう。また観点を變えてみれば、お房の人生を凝視し、具象性をもたせるだけの肉体的なねばりを喪失していたとも言えよう。しかし、病中なお、創作的姿勢を維持しようと努め、また啓蒙的情熱、批判精神の燃焼を堅持し

つたつたことは、やはり、通常の婦人のなし得ぬところであつたとしなければならぬ。

4

第三の時期のものは、明治三十三年十二月十一日より、翌三十四年一月三十一日までのものと、最晩年の三十四年三月十九日より、五月二十日までのものである。五月二十日は死去の五日前であつた。

この間は、死を半年後にひかえての日々であつたから、当然、その病状は悪化の一途をたどっていた。明治三十三年十二月より、翌一月末に至る間には、すでに発熱、高熱不眠を記しているのは十数日に及んでいる。それでも、好天気には近傍へ車に乗って出たり、前年に没した夫信行の墓へ参ったり、家にいるときは庭を歩き、花を描き、詩を作り、漢籍をひもとき、写経をしたり、数年前と変らぬ有様である。こういうことは気分を散じはしたが、病勢を進めることになつた。十二月十九日には医師が診て「余程元氣沮喪し玉ひたり、服薬可然」と言ったのに対して、「いやもう夫には及ばぬ実、逃支度だから」と言い、医師を惘然たらしめている。また同二十七日には、十年前までは「功名心」にかられるところがあつたが、夫信行に、「既に立憲政体となれば吾々の望成就してこれ程結構なる事はないじやないか」と言われ、大いに反省するところがあり、

且昨春、長城居士示寂の一大事を目撃するを得、其後次第に

病深く漸次に世間と隔離し静臥一年余聊か昨非を悟るを得たり。病は吾に於ての玉宝たりと悦ぶ。尚半歳一年の長寿を以て心根を練磨するを得ば幸矣。冬尽くれば春來り、夜あれば昼あり、百歳此世に在るとも何の變化もなければ妙味もなし。殊に吾の如きは一家の上よりいふとも有も可無も亦可といふ身、未練の存すべきところもなく此無必用の身にして幸に衣食余裕あれば精神琢磨に此上もなし。病軀日を逐て枯衰する、是亦愈清地向ふの旅行なる哉。(傍点・和田)

という心境に至つたことを述べている。無目的無作為にしてなお心根を練磨し、精神を琢磨し、清地向うという自己形成の純粹さに法悦を感じているのである。また、翌三十四年一月一日の所感の中には、清朗の天地の描出のあとに、「此清き天地に棲息して何等の不平がある、何等の痛苦がある。時に迅雷風烈なき能はず、時に疾病愁痕なき能はず、されど終には無垢無愁に帰する也。人に病と愁とある。是皆己を琢磨するの材料たらずんばあらず。」と述べる。

このような心境の及ぼすところ、自己の病状は、その身体の痛苦を排して凝視され、しかも記述される。そこにリアルな、ときには暴露とまで見ゆる描写が行われる。この病状の描出は、三月からの日記で改めて注目することしよう。

こういう一つの余裕ある姿勢の及ぼすところか、先述してきたような随想風な記述が相変らず多く、一月五日より、二十六日の間に九編を数えることができる。

その随想の一端をなすものと見られるが、三月二十日の項に、改めて、日記を書くことの意味について考究した一文がある。

二十日晴(明治三十四年三月)

前日記一冊けふはいかにするも筆取り能はぬといふ日四十余日間には折々到着せしかも、一日やすみてはとあとものする事のかたきを思ひて、こゝちのあしきをしのび、稍く間断なきを得しは、吾れ自ら喜ぶ。かやうの事は、何の益もなきぬのみならず、死後もし他人の目にふれなば、徒らに無学無識のあざけりをのこすに過ぎず。されど吾は死後の名は少しも思ひ煩ふものにあらず。唯この日記が、日課のひとつとなる事と、人に喋る代りに、紙にもいふの気楽なると、又後日自らよみておもしろき事と、而母君がこれをよむをよろこび給ふ事、他の婦女が、新聞のつゞきものをまつが如きなることによるなり。

ここで注目すべきは、日記の目的の第一に「日課のひとつとなる事」があげられていることである。これは、病床にあつても、日課という一つの秩序を自己に課していることを意味している。ここで、かつて、彼女が九年前、明治二十四年の晦日に書いた日記の意味を想起せねばならない。そこでは、日記を書くのを「家を為むる者のつとめ」とした。それを私は、彼女がみずからの真実を確認する手段であると解釈した。そしてまた、旧臘十九日には、病床にあることをもって、「心根を練磨する」事とし、「精神を琢磨」することとした。それは、無目的で無為な自己形成の営

みであることと見た。この病床にあって、自己に一つの秩序を課すことは、やはりその一線上にある精神的格闘である。この無目的な純粋な自己表現による自己の客体化は、おのずからなる表現の契機たり得るのである。この純粋性は、一般に優れた日記文学の内包するところであろうが、死の近きを自覚しつつ、なお自覚的に自己に鞭打つ形で、自己省察の営みを課するところには、凄惨なまでの真実を想定することができよう。

もっとも、「後日自らよみておもしろき事」というところには、やや自慰的な色彩が見え、その甘さをかくすことはできないが、病者の場合、これも自己の生命の存続を反芻し、確認する姿勢として同情し得るのではなからうか。健康者が、自己の強健に甘えたり、日常的な榮譽を誇ったりするのは、おのずから次元を異にするというべきであろう。「おもしろき」とは、自己の果敢な闘病を確認し、ひいては自らの練磨を励ますことにつながるものであろう。

またこの、日記の目的とするところを記した後には、その余白に自分の病臥の姿を描いたとあるが、そこでは「今の如くやせ衰ふるさまのこゝちよからぬ為、誰に遠慮もなきぬ事なれば、少しく頬辺に肉を加へたり」とある。これは自己凝視に反する甘えのようにも見えるが、自己を飾り装うというよりも、生命の存続への呪文にも似た衝動によるものと言うべきではなからうか。それにまた、自を装うと見られるであろうことを、隠さず述べるところに、一つの真率さをも見ることができよう。

またこの後に、「此凶の傍らに『一雨でちらしもやせんさくら花』と題し、了りて熟視稍久、初は只なぐさみの積りにて描き、句も考ふるにもあらでかいたるが、何だか既に其死後を見て居るやうな、而今見て居るひとがこのわれかなと、殆どきちがひじみたるこゝちして、遂に一咲して其帳簿と別れたり。」と述べている。ここでは、自分の描いた画中の人が死後の自分であるようにも見え、また画中の人が自分で、いまの自分を見ているのではないかというような、奇妙な気持ちになってきて、日記帳をふせてしまったというのである。このような微妙な繊細な心理をも克明にたどって書きつけているところには、その文学性を十分に見ることができよう。

このころには、このような自己省察のほかにも、他者への厳しい批判も見られる。彼女の書齋へだまって上ってきた人を、「この者来りし時、人すくなければ自ら茶を煎じて与へし事ありしがかくのときため如此為に心とけてか、案内もまたで堂に登るとは言語同断」と難じている。しかし続いて、「と、おもしろからぬ感したるが、吾はいつてもこの流儀にて交を絶つの場合往々あれば、しのびて何もいはざりしが、実に小人の養ひ難きには何人も困ずめれ」(三月二十一日)と、若干自己批判を加えているものの、その結論の厳しさは自己批判を越えている感がある。

また、四月一日の記事で、二三日前のこととして、大磯町長(張氏)が訪ねてきたことを記している。彼は、蘭を採るために近くへ来て寄ったので、わざわざ訪ねたのではないということを三

べんも言う。彼女はそれを内心笑いながら、帖を出して揮毫を乞うと、「書は日本一と自ら許す筆を揮ひたり。書も其人物と上下なし」という有様であった。また、「母君傍らに在りて齒をすゝめ玉ひたれば、面倒なりと無愛嬌にしりぞげ、吾は矢張中島夫人与同じやうなる我まゝものですからと母君に語るこそ迷惑千萬、我まゝはわれの最も慎しまんと欲するところにして、わがまゝならぬは常に母君のほめ玉ふところなるに、一面乍我儘の評を下すとは酷も亦甚哉とあとにて笑ふ。其内春台の掛持持参して緩話せんと約して去る。其挙動の騒々なる読書家とは見えざりし」とも評する。

これらは、かつて、二十四年の晦日の記事中の「友人の悪行爲を遠慮なく諫むるの勇あらしめ」と言い、その悪行爲を「記存する勇」を欲したところを、そのまま実行に移しているところと言ふべきであろう。極く晩年において、死を覚悟し「清地向ふ」者の境涯において得られた「勇」なのであろう。

また一方、人の好意に感謝をしている記事も多い。三月二十二日のところでは、木村の養子という人が来て、死後の詩集出版のことで、多くの書籍の処理などを、父が心配している旨を伝えたところで、「己れはこれ程うれしき言葉聞きし事なき程にうれしく感じたり」と書きとめている。

また、五月七日の記事で、進藤という出入りの男が、義太夫の駒介という師匠を連れてきて語らせるところが見られる。そこで、駒介が毛谷村の一段を語ったのであるが、その至芸に聞きは

れ、「吾は義太夫それ自身に泣くより、かく一芸に達する幼年よりの苦心如何ばかり、而世の慣習の為に唯翫弄物となるのみにして、少しの尊敬をもうけぬに吾は泣かんと欲する也」と言っている。これは、芸術に対する鑑賞眼の鋭さと、それに携わる女芸人の社会的地位の低さについての慨嘆とは、湘煙の芸術への姿勢と依然堅持されている婦人解放の叫びを示すものと言えよう。

いよいよ病者たる自己への凝視の実態を見なければならぬが、まず、リアルななかにユーモラスな余裕を示した記事を見よう。それは、四月七日の、正岡子規の病状と自己のそれとを比較した文章である。

子規がこのごろ絶えず左肺がふつ／＼と音するやうになりぬと筆す。吾之を讀みて、実に世の中は、道中雙六の如きものなり、吾は人のあとを追ひ、人又吾のあとを追ふ。東京両国橋を出立して望むところは、はやく京の御所に着せんとなり。其道中運よく川どめにも逢はぬもあれば、酒錢を費して三四日の滞在せねばならぬ不運ものもあり。されど此運不運もんとあてにならぬなり。三四日滞居して居るかと思れば、六の数四五回も続けば、乍ち人を飛越へのりこへて先鋒となる事も往々あるなり。又早くすゝみすぎて再び三井寺辺につきもどさるゝもありて、鳥渡容易には入浴出来ぬところが妙なり。吾と子規の病気の順も此すごろよく似たり。世の中の病者吾と子規とにも限らねど、彼時々病況を筆するを以て、殆病兄弟の如き心地するも亦爲何縁ぞ。子規の左肺

はこのごろふつ／＼といふと、吾は五年以前より絶ず此音するのみならず、今は胸部全く鳴りやかましくて眠られぬ事もあり。

このユーモアは、不治の病にある者の諦念とも見られるかもしれないが、既述のようにみずからをなお練磨することで自律をはかってきた彼女にとっては、単なる凡俗の諦念ではなく、すでに現世をのり超えた「清地」にあつての境涯というべきところであらう。なお子規は、周知のとおり、この翌年、三十五年九月十九日世を去つた。湘煙より一年四か月遅く「京」へ上つたのである。

四月二十日の記事は、牡丹を描くところが述べられている。

朝半日又もや墨牡丹を描けり。意に適せねば改めんとて、愉快なり。意に適すれば、更に愉快なり。筆を弄する為めに、病勢を添るとの注告はあれど、いづれ不治の病と定りし以上は、三十分間にてもおもしろきが何よりの賜なり。此賜物あるが為に、尚余生ある如く吾は思惟するなり。又此愉快を全く抛擲せねばならぬならば、一日も身を置き度世界とは吾には思はれざるなり。其故発熱は覚悟の上にて、聊かにても、気分よければ、直ちに机に対するなり。

ここには、享樂的とも見える一種の芸術至上的な姿勢を見ることが出来る。生命よりもより高い価値を芸術的創造の喜びに見いだしているのである。芸術をもつて、病体を超克しているのである。

これらは、病床のまだ明るい一面であるが、いよいよその病状の実態を凝視し、描出するところは、凄惨を極め、この日記の真髓を發揮する。

右の牡丹を描いた後、食事のことが書かれている。そこでは、好物がたくさんある季節で、筍豆腐汁がとくに好ましいのだが、「口には美味なれど汁を啜る元氣衰へし為、もし一碗を喫し得ば、がつかりとして外ものに箸降す能はずしてやむが常なり。」と言ひ、また蕎麦もすすする音をたてることができないので、その味の真味を味わうことができないと言ふ。これは、言うまでもなく、肺の機能が極度に低下しているので、吸うことができないのである。茶もすすれず、茶を噛むと述べているところがある。

四月二十二日には、

熱も極度に達してや、発汗となれり。医を呼ばんかと傍人いふも、其講する策は、已に定まりてあれば、無用なりと拒む。夜七時ごろには、汗も稍くうすらぎたりしが、胸騒ぎ甚しく、宛も痛く何かに驚きし時の如く、是は不思議なりと、よくよく考ふれば、全く鼓動の留るなり。即ち脈の結滯を感じるなり。かんふるを注射する期の遠くにあらぬにはなきやなど思ふ。安静の外なしと、四肢を可成動かさずして臥す。苦惱なか／＼に堪へ難く、夜間少しく静坐す。時に地大に震ふ。知辰器三時を報す。

と記している。このような記事は他の日にも見ることが出来る。五月八日には絶対安静の様子が書かれている。

此日は、終日書齋に入らずして枕に就けり。日々二三時間枕を離るゝとするも、一昼夜を算すれば、十八九時間を暮中に暮さざるを得ず。新聞でも枕もとにて読みてくれるものでもなくては、かなはんなどは母君の言葉なり。かく臥して居るつらさは、傍人^{そばじん}の想像する程にはあらぬなり。傍人は第一退屈に堪へぬなるべしといふ点に、何人も同情を寄するなれど、實際は他人の想像する如く退屈はせざるなり。退屈をするやうなれば退屈に伴ふて、何か為して見んと勇氣が生ずるなれど、今は夫程^{それほど}の勇氣もなし。いつまでも目を鎖^{とち}て居る事も出来れば、口を黙して居る事も出来る。却て目や口を開かねばならぬ必要の生じ来る時面倒なりとの感念生ず。呼吸が楽ならば、世の中に何の望みもなしと思ふ。毎朝面を拭はれる時、手拭の鼻と口との近処に來りし時の痛苦、人の想像すべくもあらず。又自分に拭へば、猶これ以上の息ぎれが来る故、やむなき次第と耐ゆる^{たへ}なり。これを早く手際よくやつてくれる時は、非常にうれしきが、何か喋りつゝゆるゝやられる時のつらさは得もいはれぬなり。又寐たまま櫛げづらるゝ髪、うしろの一段に至りて頭を枕より離しておろせし時の一刹那、心臓は破れもせんかと思ふ程の時あり。如斯^{かくして}事日に幾回たるを免れず。夜の眠れぬ、食事のむまくなきなどは、最早小言の中にはいらぬなり。

これらの文章が、いつ書かれたのかは明確に知ることはできないが、おそらく、この絶対安静を解かれたとき、心をはげまし、

身の苦痛に耐えながら書きとどめたものであろう。その記述のリアリティーは、まさに凄慘という他はない。

最後の日記、明治三十四年五月二十日の記事は比較的明るい。永眠の五日前である。

朝無端^{あき}出納帳一見せねばならぬ事到着して序手^{ついで}に算盤をはかねばならず。銀行の切手、役所の入要等二三事を為して、はやくも、ぐんにやりとしたのしみの部類は何ひとつ為す事なくして、此一日も過せり。昨朝美人の投身者ありとて、なか／＼の評判なりき。美人の投身は殆ど熟字の如く、未曾^{みぞ}て醜婦の身なげたる語を聞かぬもおかし。されど、多くは其美といふものが、死の因を為すに似たれば、矢張美人にやあらん。醜婦なれば兎角天下太平なり。

わが幼時^{幼少}翠琴^{すいじん}といふ十八九の婦人、美濃より京に來り、詩文の先生を訪ひ、われも一家をたてんの心組なり。其号の奇麗なるに似付もせぬ顔^{かほ}せなり。漢学はたしかものにて、詩も達者なりとの事なれど、何分みにくきが祟りを為して、誰も一臂の力添へんといふものなきのみにあらず。文人交際の心得なきものなりなど、難くせ付て遂に京を放逐同様の待遇を為せり。醜美の関する所実^{ほんま}に甚哉^{ひどい}。

5

湘煙は狭い病室にあつて、なお広く諸事に耳目を向け、自己を凝視し、それを形象化した。そこには、かつて彼女の小説には見

ることのできなかつたりアリズムの成果を示したと言い得よう。もちろん、小説のフィクションと、日記のノン・フィクションとは容易に比較しがたい点もあるが、彼女の小説は、その秀抜な批判精神と改革の啓蒙的情熱が、そのおかれていた現実との均衡を失いやすく、また時代そのものの未成熟も手伝って、十分な形象を果すことができなかった。そのような、現実と理想との能動的な場における確執をもたない病床にあつては、すでにフィクションの必要もなく、素直に自己の内面を披瀝し得たものと言えよう。その点、湘煙の文学をこの日記において評価することは、若干の遺憾なきにしもあらずであるが、やはり高い評価を与えるべきものと思量される。

注① 明治二十四年十二月三十一日のなかに「明治廿四年一月一日より

十二月三十一日までの間一日も筆を執るを怠らざりし、記して九冊に及ぶ」とある。これによってみれば、少なくとも二十四年一月一日より以後継続執筆したことは確認できよう。

② 坂崎紫瀾の妻。彼女が借金を申入れてきたのである。紫瀾はこのころ新聞社で月給二十五円を得ており、当時ならば十分一家を支え得たはずである。

③ 「中島湘煙の小説『六谷女子大國文』十四号（昭和五九年三月）。

④ 夫信行、号長城は、湘煙の結核が感染して、明治三十二年三月二十五日没した。当時は大磯の別荘に住しており、墓は近くの大運寺にあった。

（わた・しげじろう 本学名誉教授）